

正香道秘傳

上

ヲ多9
2295
1



在二十七頁

月 移 9
2295
1-4

刻校正香道秘傳題辭

衆技各有法。有法者有道。其道據何模。指當讀先覺之書。先覺已徂。言岐旨隱。雖為其書三寫。而成魯魚。使晚進迷津。余多年樂此道。時探四方。奮卷校之。正之。而藏笥。近書房。巧鑿。因再叙舊聞。參以新得。尚恐瑕類未除。豈為大方。引削。方竹杖。添蛇足。嘲乎。庶幾幸明者訂之。



香道秘傳文三

校正香道秘傳書

凡例

一 此書は古来先達乃筆にせらる書ハ
部と合璧して香道秘傳書と号
し梓よりりるる先達を承け道に真
秘と云傳へて考るの経るものほ
て甚秘と爲る書なる故に非つかく
みづりに世よりしりしも其秘も梓約

の内校正と初と孟浪と傳寫と
後人の細程本文は混と或は文字
烏馬馬乃俚脱漏の多し今四
方小類書教部と集め校正し
ゆる中解つた事ハ附録より
辨じ

上卷

雪月花集一巻

香道秘傳書三ノ列

右の沙家乃六十六種の名番こそ外
百平種の名番系極道卷所抄
の名番百七十七種の名目より沙家
より乞求て志野宗信写して安よ
傳方書より古板下巻の骨二より入
とどども沙家乃古板なるふよりそ
寫して上巻の骨了まき

一 志野宗信筆記一卷

右の宗信筆記はるものより八十八箇
條ありてけ道乃規維とすむとせり
け書古板上巻の始よりとどども
今才了まき

一 香合式

右の宗信筆記一とまきしと宗信省
巴と代り傳へ又省巴門人へ傳へ時
け書乃奥とよ海とせりとりて

右より後代香合の定式なるもの
あり此時乃香之記の著者子孫の
の初也西三条内附公に跋ふ別
一巻ありて家より傳ふ

一宗温六十一種香名一巻

右ハ宗信の子宗温乃香記一巻
一香名ありて六十一種の香
と云ふもの是なり

下巻

一宗入香爐圖一巻

右ハ及翁齋宗入香炉并は務乃
記中て後世乃観報なるものありけ
書古板下巻の終りあり今下巻に
始より此と宗入ハ宗信が末流乃
人なり

一建部隆勝香之記一巻

右ハ志野末流建部氏の家記あり
その事字位と大同が異あり又古
法と考べしふたよりありものなり
右板と巻の終りあり今下巻才
テよりなり

一十組香之記一卷

右十組香ハ古来よりあり来しと
細川幽齋子始て文とありて香

記一より余が家傳り所
右の細川氏真名序あり系圖香ハ
後世ハ圖は名目と付也とも是ハ後人
の作しと據もなき事なるは今
古法のまゝありて是と補はば原平
香盤立物の圖右板ハ畧ありて初
之の人辭トがし固て今委く法
圖とありて補入と本書ハ右板ハ

香道必傳文三列

中の先とる名所香小巻用ら
内を盤の類うり通つ只源平香小
の用るけい下の圖よあぶり
け十組香古板下巻の才口あり
今下巻才口よりうり

一香之記一卷

右香之記唯人の他事と云
ど志野氏建部氏の事と云く

と云もたふ正傳ある人の他

からんこと申りけり事多し

は初強の二紙甚疑念一の中又

蓋あることも多し又古書な

きばなざるふあがり所んは思ひど

下巻の終よりいこと編八條下及

一 附録 新編

一 八部の書毎の終り考正異同の考

と附を齋板に張るものハ他本に
照し合せて改るものあり是ハ圖と
付る儘本に異なりてつぎ是る
事と云ふ所のものは圖と本文乃
うさふ付て考正より其後辨
ど古板乃誤他本の異同とつら
やと云ふものあり

附録奥之槩二卷

右の本書八部の中解がさき事又
いふ所はさきとのごとく秘伝のくまに
つら

大枝流母方記

香道秘傳書校正卷上

香道秘傳書校正卷上

雪月花集

五十種之内

神樂

立舞袖

くろ

林下

為五系

山陰

かみ

早梅

大枝流芳校正

栞

上馬

人

そり



香道秘傳書校正上

和名

子香ちかぐ

二葉ふたは

白路馬しろろま

おこふ

さんせう

わげまき

立田たちだ

袋ふくろ

都みやこ

斜月さげつ

似に

菱善あしぜん

金伽羅きんがら

面氣おもて

かろや

なご

杜若かきつばた

らうら

反系あかぎ

雪ゆき

あらいま

野津のつ

次子つぎこ

の石のいし

麒麟きりん

孔く

志も来しも来

中川なかつがわ

葦垣あしぎ

おやろ

久菊ひさぎく

新枕あたらしくまくら

うしろ香うしろか

中川なかつがわ

小糸こいと

己上

十指之香

太子たいし

紫葉むらさき

逍遙せうよう

香道必傳文三上

二

三吉野
中川
八橋

石洗
法苑

古來
花橋

己三

追加六橋

軍城寺
赤海檀

念珠
丹霞

沈糸
仏座

己三

右衛門家之香次

名香目錄

日親苑

育明

夕時

扇雲

大井川

地見

新樹

若菜

三芳野

香塾

袖菊

袖漱

的石

手白

探毒

清香

八重菊

玄く

香道和傳

浮橋

中川

とゆ

馬

園基

和

妻深

枕

名

花系

七夕

いさ枕

冬

すま祭

乃が毒

糸巾

冬野

花菱里

男山

物守花

かごの江

為和

川浪

楫枕

妻船

牙と所

いさ香

中妻

柳

お代

えんり

あさ

河波

くら

紫雲

大ね

古川

和系

妻系

沈

と

よこ

葛枕

人

八重垣

きく

小倉

花系

花系

香道必傳文正上

ロ

和名拾遺

松乃戸

松守

神楽

ふよう

友人

玉榮

よこ雲

くもと玉

あや先

色板

まがき

夕暮

葛花

手枕

精夜

松乃戸

松守

野々子

三ヶ月

野々子

立舞神

庭毒

友

立田

杜若

水鏡

夕暮

あづゆ

小雲

幽葉

名残

忌

松乃戸

松守

松乃戸

御竹

摘

榎屋

富士煙

訪友

仙

ふこ

あづゆ

袖林

夜衣

荊薹

山陰

波女

十丸

松乃戸

松守

香道和傳正

初乃

香羽

柴山

さつあ

新湊

系極道卷石物

名越

新旁

白鳥

八

竹岩

初香

花溪

文一

えんぎ

破山

悪

新風

新郷

あま名

えんぎ

孝矢

空茶

林香

溪水

志金

志わがり

山

志山

胸

新糸

とくさ

理

湊河

岩枕

美深

曉露

林月

つうとう

梅風

浮山

房至

宰府

ふりう

夕楊

孝系

香道必傳文三

六

凌波 林鐘 篠目 河濱 吐月 風紫樂 白浪 輝風

君江 枕竹 溪村 小香 庭梅 映花 紅紫

洞庭 竹馬 竹葉 桂嵐 子苗 漏月 塩路

充梅 六月 霜夜 麓江 炭松 殊茶 深窓 端午

病菊 雪抄 雪中 踏花 子梅 春水 袖香 鶴首

空梅 柳花 春鐘 荷冰 杜若 海棠 長安月 面衣

香道必傳文三二

香道必傳文三二

香道秘傳正

節采

葵

冬松

夜光

菱蕙

送春

丹楓

星合

深樹

雲峯

清水

龍頭

尾上

夕月

暗香

鶴川

御船山

松吹

菖花

屯陰

藤橋

籍

唐指

江柳

桐庭

暎

林雪

本下

鳥羽田

菱葉河

雲葉

斜月

花林

万代

煙林

海月

村角

風光

交毒

一聲

香道必傳文三上

小田吉 雲遊 猶雷 松風 玲庶 張書 朝明 林鶴

花經 存松 映雷 煉山 紅梅 子更 送月 迦死

新三子好 碧桃 女紅花 仙風 林葉 冬節 新梅

玉章 宇治 松系 片糸 夢見 林下 白雲 空月

夕れ 夕更 あり申 梅 庭 山梅 志本 山下

石帯 寔梅 三冬 手 榮葉 花雷 法花

香道必傳文三上

九

一文字

此一帖西三条家内府法本尺牘
今書字者也
後法本苑多并之等也

天正式 霜月日

志野宗信

右西三条家内府香之目探書月記
志野宗信傳寫
保多一古字本教部校正之考據
たのび

享保甲寅年正月

大板流芳記

雪月花集考正

一本は字と相

そりょう 一本楚流の字と相

白濁考

以異本改白濁

代黒

以字誤りゆて以異本都の字に改む

考

なご

反菊

一本は菊と菊と相

死しん

一本は葦垣と相

足垣

一本は久菊と相因て今改む

火草

十種之香の中肩書は後人の細注を

今本文より記きん事と想て削りて

丹加

一本は丹霞と相是より今改む

仏産

是に依座より或は佛の着座よりなり

大ゆき

ふこいの

春深

新葉

七ツの下

いさ膏

葛枕

乃二名と

脱

と今先子加

寸代

杞守

庭梅の下

富士煙

らんそう

右

三層と

脱と今ろは伝

水菜の下

初秋

の一名わり

十九

袖

の下

子向

あり

手後

也今

ろ

泊瀬

初瀬は同一前より後よりとて改る

すつあ

一本のあはれ

新湊

の下

古本

と枕

今

真本に

香道必傳文正上

十二

より三へうの山と山の下古本七夕い
せ香の二名あり真本にふりて今
よへうの山と

系極道卷所抄と因

里よりう

秋風

壽薺

岩松

枕

河溪

風紫系

荷

好風

雲霧草

菖蒲の下名越わり守後と正本より
今削る

枕 一本桂の樹の影をさす事とあり

河溪 正本にふりて河溪の正

風紫系 一本糸の字あり

荷 古板子苗の下名あり守後よりふりてこれを
除る

好風 一本雄風の正

雲霧草 正本よりして菖蒲の改

雲抄

一転に雲霄^{うんせう}はゆる

落水

正転にふりて落水^{うすみづ}は改む

秋葉

一転に秋葉^{あきば}はゆる

長安月

一転に長安月^{ちやんげん}はゆる

雨秋

一転に雨秋^{あめあき}はゆる

芸業

一転に節本^{ふしもと}はゆる

漢糶

糶^{いせ}の字古^{いにしへ}の無^ななり今^{いま}糶^{いせ}はなり恐^{おそ}ハ糶^{いせ}の

送月

正^{ただ}転^{かへ}は送春^{うしはる}はゆる送月^{うしづき}は又^{また}送^{うし}はゆるなり

皇台

正^{ただ}転^{かへ}はより星台^{ほしだい}は改む

山風

一転に山風^{やまかぜ}はゆる

林芝

一転に林芝^{りんし}はゆる

花經

正^{ただ}転^{かへ}はより花經^{はなけい}は改む

冬意

正^{ただ}転^{かへ}はより冬意^{ふゆい}は改む一^{ひと}転^{かへ}は冬^{ふゆ}とそらう

備雪

一転に備雪^{ひゆき}はゆる

現桃

正^{ただ}転^{かへ}はより現桃^{げんたう}は改む

加罪

一^{ひと}転^{かへ}はより加罪^{かざい}はゆる

吉道必得改三上

十四

松葉

正本よりして松葉を改む

一本は隣家より得

林下

一本はうんこうより得

りんこう

一本は白雲より得

白雲

奥書より此一帖の下面西乃字あり今正

本より因て補入と

大枝流芳校正

志野宗信筆記

香の公持の事

一たさ紙の香具のまはる人散の方へ

香の公持とP香の散持と散れ縁

とよく死合えたる極く一香のまはる

まはるの付合をぞふお似しう香弁

とたれらるるのとまはるまはるさね

とまはる時の極めをぞとくまはるに

香道必傳改正

十五

香道の香は又香の香をとりけり
 香も縁とくは合はれん事尤
 香はしりたがうは香計の香
 香子細より香較多なり時
 の縁りかまればくは也
 香なりりりり香よの縁と石
 合をさるれりり然れは又縁とよ
 くられん尤せばは細子細より織

の香のよの縁とくは合事新
 香も合香とたれ不香也
 香の香と云は香道は香田よ
 香ん香香持と云は香の香
 香の香香夜は香香の香の香ハ
 香菊りりり冬は香香を香な
 香けは香の香よ香又の香よ
 香くは香よ香何を多と

事よる者一炷二炷家おん均きん

あり

一上と香と二炷三炷も毎りて八丹處

沈みたるはたれそぬた神とわ

と見おひくよたれくやうよ丁明

免掃くけお持身一也

一香とたくる今まけりてたさ丁

然る但所神より作らぬたれ

くろくかごごん香好く火入人宿中

一且たれくと體と尸之極幸山園

時ハ度と申して一と候り毎々毎書主

のあ一本又と一と申して一と候り

二度家行を三度起人此会十人より

上ハ一毎りて三玉也

一香中同時充あ世の身は似お神

有免掃く子細くあ多れ人の香のこ

かぶら有り後子細く也

一我たる者よ人の感ト作そひ道

ゆき染りうそ先も無用よんそ故也

香はくが物そく名とつたりふ

一度二度とりれそ改わりて言

あり

一香無りん時我次の人よ一礼あつと

意は度中へ礼儀無用あり

一香乃と云くゆきしれ無出日ハ之焼

有る後ハ不及戸焼物そく礼扱る

中一く無者かどをもそり用也

一茶の湯気の時は茶をこして香を

と毎日ハあく戸あく之焼風煙い

ろつともどくく魚人事そり用く餅あよ

ても茶の湯気は之焼きくハ必き香

つ出となくるあつと魚とそり用と先

香道秘傳正上

十六

傳ふくくあり

香と聞時うろれ座とる事名

おん子細く書ととりては後言ん

賞歌の人座とまされり香

小前座とてりる會くあり

香と聞時人座とる事名

香の細くは折よく座中人

入て座中人なり

聞向うとあり

香の毎り座中人と扇わく所

ひき事不香然と想利扇の利控

細子細く物ども聞かよありつひ

時なそらくと分別をそそをた女

一名香一概よ本がさよ多くた

事たよあやまりるあり座中人多

人教乃時わはがさたよとて座

香道秘傳改正上

香道必傳文三上

ふねの先程の匂はよきものなり

又六人の内

一 ぎんよ香こぐれ付とそ中よぐやく
 人ありあやまりあり何時もられ付
 ころ小刀よそそけ落してあは
 一 銀の香れとそい香けとゆびよん
 ぎんの角とけとみ香けと揚よ
 正下あそ香煙よ香取時も同家

ふん又揚そ着よせすふも香取
 今一わらわらあり

一 根の寸法は九分四角ありてすまは
 一分宛よとるあり

一 香あり扱とてみよとんの上
 よ香く焼直る所交のこい
 ふんよやふ香所はあり

一 香よせん香よま日野よの香よれ頼

香道必傳文三上

一 焼酎名をさんとしくたうきん物あり
名香園時乃銀まていかりうけんも
そく同後人又香の希中んごよれ
く幸有る猶りゆ也東よ焼酎一
自然の幸あり

一 春日野の園時公けいひありこも知は
曰み人のあともそそめりゆりつと云
て花物よんちもさる人の見懐か

くそあやまると休むとゆは

心ゆらあり

一 香を人よ所望の時一たると云い趣

一 煙は焼くと所望するあり

一 人番と所望の時も時分れ季の香

元よはを其ま乃大名とる知んは

常飲乃人若るよそい季の香り

がえらとそまの丸く 東山殿沖小社

乳酒の香たがうとまらしておとわ
ゆる人時うらとさく人どくいの香煙
しつと和さう

天仁の香たがうとまらして武家
は大名の香たがうとまらして
いもくと付物い袋さうは方さとも
ふけよとやういふ方くりん香た
くはるあり

一平仁の時香たがうとまらして事
香と床よと事もたそと香た
ゆもた香煙計かまら
一香煙そく人い事あつ時いたのふ
まいたのふと香煙の煙よわら板
りしそつりあを煙るまらせり
清あいたのふと香煙の
ふとひのふげうらにゆら也

一回掌のこゝろ香煙のこゝろはたの手ふ
 まてたの手とば香煙の申程のこゝろ
 ふ指されとあけり極りそくおとさ
 けえんは又たれとば後と人の手
 の下にさうわうあてたの手とて香
 煙おとさぬ極りおとせ則たの手ふ
 ごとくおとさる

一 下掌のこゝろは香煙出といはれられ
 とくそとてさげぬ極りおとせことと
 清取人のたれとては香煙は清とて
 一人あかぬ女房おとて香煙清と
 けいあかぬおとてさげぬ極りおとせ
 て手ふはふはふ
 一 香煙の白床よ香煙とて合はる
 との香煙の煙とて合はる
 香合と合はる時ハ下に沈とてさる

口くちり

一香合者袋香煙香合の時名香

六煙入香ハ四煙ハ公持次第何なり

とも一煙ハ香の香と入煙

一と一板め川づりれ香合よハ院初

先程より日りて香の是に於て

清まずに入香の長と四分廣五分

厚と一分と人の為時とよなりた

香れア煙と入名香ハ入物也

一火ととり時灰あつぬ公持火と入

とよ座とつけと又利の火と香

かあつ先板をわして又利の火とあ

乃穴へ切先とと入なりて入くかげん

よと時灰とつけととあり

一聞香煙よかざり灰とハ香合よとと

貴殿の着とて子細くは傳ふ

一灰よの香煙せりしより少きくつたて
てよの位原とくよの位原のありけり
小の香より又多の時を何の事か
向金もなり

一ワグ香煙時香より立ぬると久敷
ゆそな式よりなり立てしうらふ
酒と事よ然し少くなり立しとよ
何ふよ人の位原又さうやんは能く

て前よ何より香も則ちとせりし
かよせととも然也

一我焼香火はよの香よりよ
ちよ然しよんよとよの不
位よ人のさの時よりれ
不知しよいよに位
致覚悟よりよ分
一見よ家よ香よをよ時よ包紙か

了く時久あまたうれ久と声に定く
指らり香もふ趣は沈みたく事あり
るあぬえ

一 大子の色一 三度とたぐしはあ
は 香あり

一 蘭奈の香 色一 十度とくくく

香ありけし字り秘り也

一 ち本色一 三度と焼魚一 六三権の

外よ六三権の香加も不及甲も外加
其なり多く墨守の焼りるるあ伏
又三権の色一 三度と焼魚いぐとむ
魚んころい物と不知あ如

一 香煙の火より如時かうう着てと
よ虎とほさめくそ虎のとは根と
墨香焼魚一 それもよつぐは色
と一焼虎の字り墨入るそれと虎

とらうびらもせき人^{せきじん}の^て時^{とき}ハ^は少^{すく}火^ひ紙^し
 此^{こゝ}の^く系^{けい}なる^るや^やう^うは^は可^か成^{じやう}け^けの^のた^たり^り也^{なり}
 一^{いっ}香^{かう}煙^{えん}ヲ^を然^{しか}り^りて^て家^か来^{らい}り^り床^{とこ}へ^へ清^{せい}香^{かう}
 煙^{えん}切^きれ^りて^て身^みを^をま^まが^がて^て西^{さい}壁^{かき}を^をま^まじ^じ
 又^{また}客^{きやく}来^{らい}り^り同^{どう}切^きれ^りて^て仁^{にん}布^ふ中^{ちゆう}へ^へ理^り
 と^と云^いて^て床^{とこ}へ^へと^とて^ても^も尤^{なほ}り^りと^とす^す其^{その}の^のて^てい
 よ^よより^{より}覚^{かく}悟^ごあ^ある^るべ^べし^し床^{とこ}よ^よ至^{いた}り^り時^{とき}を^をま^ま
 より^{より}口^{くち}傳^{でん}者^{しや}一^{いっ}丁^{てい}も^も得^える^る者^{しや}也^{なり}

一^{いっ}名^な香^{かう}煙^{えん}の^の沈^{しん}り^りの^のま^まと^とり^り
 や^やう^う一^{いっ}段^{だん}格^{かく}と^と如^{ごと}く^く傳^{でん}沈^{しん}又^{また}ぬ^ぬは^は物^{もの}
 粉^{こな}茶^{ちや}三^{さん}株^{くわ}種^{しゆ}入^{いれ}る^るも^もあ^あま^まし^し少^{すく}の^のこ^こを^を
 多^{おほ}量^{りやう}と^と入^{いれ}る^る一^{いっ}日^{にち}一^{いっ}粒^{りやく}は^はあ^あて^てを^をま^ます^す後^ご
 又^{また}よ^よま^まし^し水^{みづ}を^をま^まる^るん^んど^ども^もあ^あら^らに^に白^{しろ}拍^{ぱく}を^を
 お^おと^とし^し物^{もの}目^めを^をわ^わて^て日^ひは^はあ^あら^らに^にあ^あら^らぬ^ぬあ^あは^は
 う^うげ^げが^が一^{いっ}少^{すく}を^をま^まる^るん^んど^ども^もあ^あら^らに^に色^{いろ}下^{くだ}
 中^{ちゆう}へ^へ口^{くち}傳^{でん}者^{しや}一^{いっ}丁^{てい}も^も得^える^る者^{しや}也^{なり}

一香爐大瓶の物可受口傳あり第一
梅の文座の物とよつここの物と一分

とと公お梅よ是の物あり口傳

一法隆寺の天竺よりたきし乳を液

物よ香の竹の世もあつたはる然

よ神の穴より嵐かぜ吹きて世よ

廣中よりと口傳の法隆寺家苑よ

是の物とて法隆寺と云はばと

けりてたきしと口傳

一東方の法雨松御一代一香をたき

へ所系物の時を和首より一寸

男系然にまされたり子細に伝を

より口傳もたきしと云はばと

一法若野の東方のうらふと口傳

一遠く南都法をよ有りと云はば

ちの口傳と口傳

一八橋ハ古木の波目ともりつる
一古木と号する幸道巻老人地分
の

上 中川 中川 釣合

一唐にちりせん僧と渡りてせりん

一香女 下八風中川 云方標は物

一法花の九別法是ちりて同殿の物

一河和らるる及取法毫と云は法花

ハ名刺さるるありある香也

一夏草はよむいりあくこころは

一室を草は夏草のまうし成と云

一人やうらゐるあつちいりて

一あま地はほくくさびらるる

一さるいあつちりりりてと云ん

一わらわの末のうらうらなは名付

の向ハ末と云るぬあ

一 香の縁をくわうくくとまうわらさう
字ハハとあらなる也

一 岩角をさるんかんよき也

一 赤梅檀ハ我々聞信なるかすは梅也

一 天をくわう

一 丹霞松子乃か子細く之を葉取にけ

一 多き号丹霞也

一 二月もあわく香箱とも云ふ二万このう

一 くりおがたを云字紙香人合也

一 蘭戸ハ蘭者侍よ似ら香より名物

一 同布りん坊まへ

一 大子来ちす焼板ハあよさ甲てく

一 丹霞沈糸をそたぶう夜も香も

一 せんしやくしそふ具をうらまも

一 けあ程そりらんとのひち

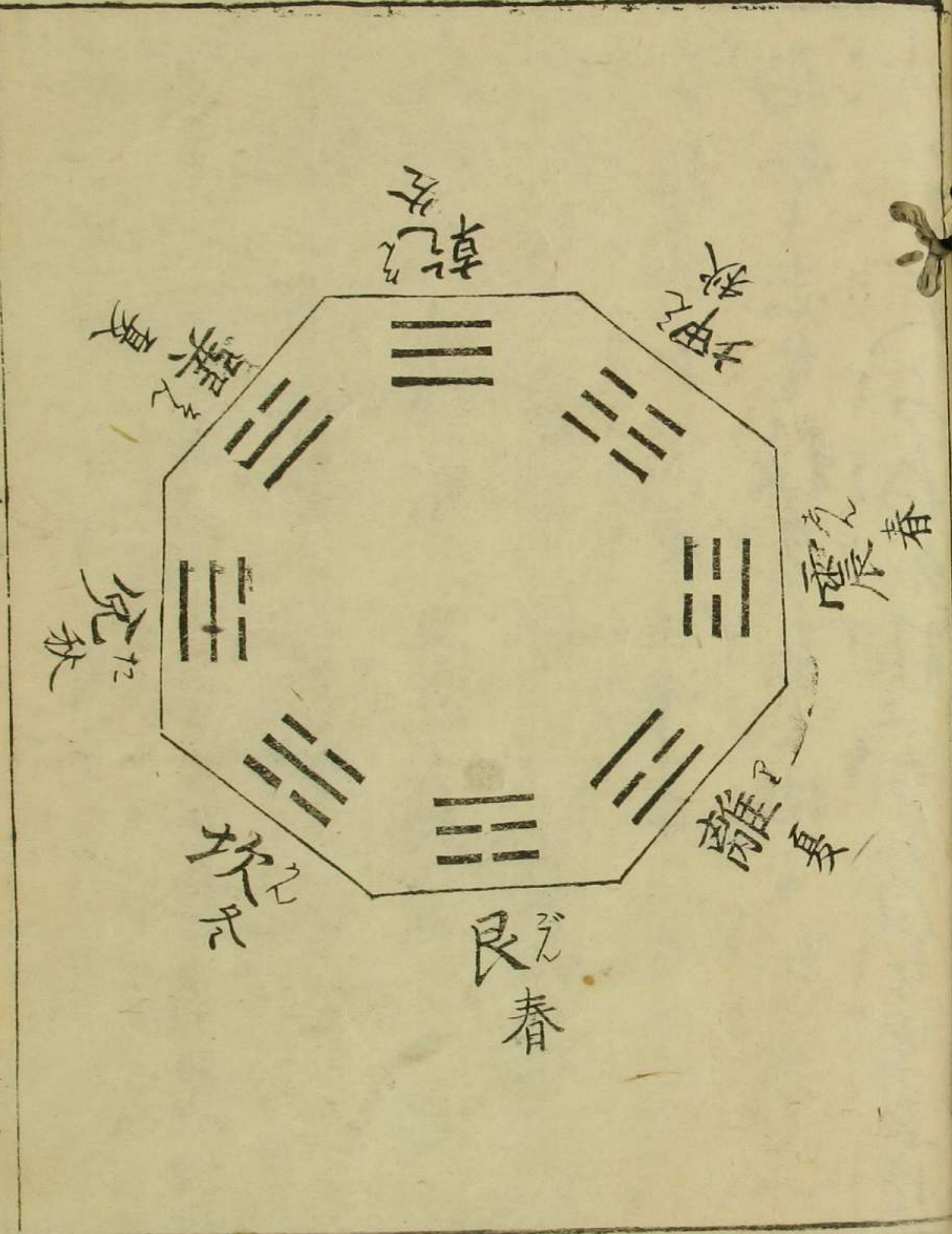
一 くり乃定まり

一香と聞時香炉火と初時白臭と
 うまきふ風情あはれぬ事不
 然いふ事の物とふを氣を
 一物の香爐は銀とくはすまとい
 ひひの方へさそへて香一は
 一物の香炉は口ハ相いそ刻
 どうりふ首付ハハハハ我
 のこころはくゆけはるん

よれはととと
 一又どうもそり相は首付
 ひひの方我はくゆけはるん
 きやくにまりはるん
 一人の口ハハハ
 一切生物の香爐物と同義はるん
 ことと
 一香炉火はくゆけはるん

小香のしくみあり
 八卦の香爐にて香同士の香を
 と面をかきまじりに香の
 著毎の内の香合同ありの
 事とゆふとるの香の所と
 あらうとありとあり

八卦香爐之圖



右之条之口傳之事自其年之時約十
年三條及に依致慈生約修
源の子孫於垂く其秘才一けり別
人相傳戶族帯く有る後公も亦ハ
唐物目所方不能所孫真相珠光松
本抄老にお宛由新中戸一也苗附ハ
お知く若れ教多を中入お考一
後い別入ふお知極この後及新里百中

誠厚るべき古今新有子細く其
心得け一冊不々之亦見く自他意深
執心仁ハ多々人悟見屋条教と内
板下にお傳其文字上條多之也
之種香ハ不々之傳久子其所香初
存立此中ふ同之調金者也
文龜元年九月日
宗信

石巻志野宗信八十八箇年等記と
云て新代香道の飛渡りもの
あり甚貴貴と云一房間の刊本
誤多ふより校正一冊

尚享保甲寅年正月

古板流考記

志野宗信等記考正

一名さくもと字一川衍文本書刻

一板古板ひよひ今改

一名香一焼よ本がさきくけ終よ

一是初の物よ本がさきくけ終よ

又六人の内子独と云よりの時と云

後人の種よ本がさきの圖あり

なりん一誤て本文よ誤と云

かひわりを^{そのつら}後地の字本と合せ^{あは}るふ
い^{この}久^ぐ年^{ねん}固^こて^と意^い板^{ばん}と改^かて^て本^{ほん}を^し是^{これ}と
圍^{かこ}で^ま今^{いま}より^{その}考^{かん}と改^かと

一^あ多^たの^の本^{ほん}の^の字^じと改^かむ

一^あ香^{かう}煙^{えん}を^ま人^{にん}の^の中^{ちゆう}に^あり^て改^かむ
い^{この}下^かの^の中^{ちゆう}に^あり^て改^かむ

一^あの^の手^て後^ごより固^こて本^{ほん}を削^けぐ

一^あと^と板^{ばん}を^しい^いる^る中^{ちゆう}に^あり^て是^{これ}より改^かむ

一^あは^は井^い字^じ保^ほり^り改^かむと改^かむ

一^あ香^{かう}煙^{えん}の^の字^じを^あら^らわ^わせ^せ改^かむ

一^あ香^{かう}袋^{たい}の^の結^{むす}字^じを^あら^らわ^わせ^せ改^かむ

一^あ書^かれ^れと改^かむ

一^あ古^こ本^{ほん}を^し一^{いっ}と^と云^いふ^ふ條^{じょう}三^{さん}煙^{えん}十^{じゅう}煙^{えん}と改^かむ

一^あ字^じ本^{ほん}と考^{かん}合^あせ^せ三^{さん}煙^{えん}十^{じゅう}煙^{えん}と改^かむ

一^あ香^{かう}煙^{えん}の^の大^{だい}より改^かむ

一^あ字^じ術^{じゆつ}文^{ぶん}を^あら^らわ^わせ^せ改^かむ

一^あ名^な香^{かう}本^{ほん}の^の洗^{せん}つ^つり^りと改^かむ

香道秘傳改正

三十一

御字又一本よのよゆり今本虫改
 一香體大乳を掛け申と平さ
 い字解
 かし一更本を考ふるよゆり今
 本書改又を掛わり一本わりとあり
 よゆり

二三吉野の是より道遙
 古板の中前後錯乱一
 道遙の程
 八橋の下に入八橋の程
 脱漏せり八

橋の程圍より何ぞ東の
 程ありとせん
 や是程の一程より更本
 教範考合
 古板と今本虫の
 改り又古本
 の程の中面白
 程のありと

面白
 面白より程の
 事まで他本よ
 考ふるよゆり
 今本虫の
 程ありと
 一
 程の中
 面白
 程のありと

香道秘傳改正上

四十

るよ修る固て不也改て又修よ

三乃字こきこころ修この中と後人

一二三と修よ虫加へる付せしものあり

魚一今あきと不書削去を修の奥

乃築よわり

一鴨の香煙け修よ古板 古板んよ

ととべーとわり他不よ考合とよ

丸と修に修る固て不也今是と改

一切生れ香煙きけ一條巻板前後

とよの今改入りあり

右書奥虫の中 虫傳と云二字他不

は真相よ修則相阿修り今不也

改

右志野宗信筆記 齋板張るもの

考改むる改る院と志今て世よ修よ

内事あり

時いたの札と打たの者たより毛
多り由さうく受いたの札と打た
乃細板と六分半をさ一寸九分又厚
さ一分半の板とけつりき面り
我この名案と虫くふいたと一枚又
ちと一枚の書紙包紙とゆうとやう
一枚と八つは切てまけと細く名
紙に載けて書れ名とさよ虫くも

下に番まき名案と虫くふいたとやう
げくひ移りふり見極まてまき同紙の
申よ番と色人おさるひ人の十煙者さ
りてめそよ対の所まひおとく行色口傳

念作想利者番合と云事及仲作
三条屋は家と蓋和合と云事其具
くそ縁とみく具は仕交に得る意

以^コ又^ニ珠^カ安^カ丸^カ之^カ里^カ石^カ行^カく^カと^カ名^カと^カ砂^カ
 奥^カ切^カと^カ汚^カ穢^カ義^カふ^カ亦^カあ^カは^カは^カ汚^カ穢^カ而^カ具^カ
 何^カ人^カ判^カ者^カ後^カ菴^カ踏^カハ^カ三^カ条^カ履^カ戸^カ下^カ也^カ
 我^カの^カ之^カハ^カ不^カ可^カ之^カ失^カ念^カ者^カ也^カ

有^カ一^カ札^カ字^カを^カ入^カ事^カ判^カ石^カ五^カ字^カ宗^カ温^カ
 内^カより^カは^カ履^カ志^カを^カ依^カり^カと^カ成^カ了^カ金^カ也^カ
 目^カ中^カと^カ紙^カ何^カ中^カ紙^カ喜^カの^カ也^カけ^カい^カん^カ也^カ

十^カ余^カ々^カ条^カを^カ書^カハ^カ他^カ見^カと^カ書^カハ^カ書^カ也^カ
 之^カ一^カ字^カの^カ也^カ

永^カ禄^カ元^カ年^カ月^カ日^カ
 省^カ巴^カ

志野宗信香合記考正

名香合 この一の 下のの字異本にありと補

五十煙 煙字異本にありて改

香の名と上の字の下の字脱今補

ふ見の の字衍文中書削

おさわの の字本書改ふ字

十様巻 様字依本改

何を為るべきはか免具切の

殆ふ下立失念作 何をより作と云まて

珠交 珠字の一本改

た の字本改

右 奥書 申 思合 の 三 字

恐 ハ書 誤 を 入 り 余 未 考 識 之 乃 明

解 と 申 の 下 字 本 改

の 字 乃 の 字 脱 解 恐 ハ 前 の 字 を 入 り

日者 け 日 の 字 上 の 月 の 字 下 に 入 り

青梅 あおばい

花梅 はなばい

漢栲 かんかく

月 つき 禁裏栲 きんりかく

紅梨笑 こうりあう

斜月 さかづき

子多 こた

法花 はうが はつが

八重垣 やえがき はちがき

花宴 はなうたげ

明月 めいげつ

笑 わら

卓 たく

橋 はし

丹霞 たんげん たにげん

花影 はなかげ

次广 つしま

上薰 うへかほ

隣家 りんか

夕時面 ゆふときめ

晨明 あさあけ

雲井 くもい

泊濃 とくのう とくのう

寒梅 さむいばい

早梅 はやばい はやばい

霜秋 しもあき しもあき

七夕 たなばた

篠目 しのめ

為重 なむしげ なむしげ

上馬 うへうま

心五十権 こころごじごけん

梅 うめ うめ

新田 あらたのち

白梅 しろばい

梅 うめ うめ

花言 はなごころ

榮子 えいこ

花友 はなとも はなとも

明石 あかし

十又 じゅうまた

手杭 てかき

卯 う

二系 ふたけい

祢 ね ね

荷紅 にほん

初合六十一種之以内十三種追加
右老父宗信は伝授也今我知余
之校別るは執心口傳せ不送一率相
傳干末子多を斎者巴平矣依之
新不可有外日人矣也

志野入道
宗温

天正式部月日

志野不冬齋

右老父宗信子宗温が筆記する所
の六十一種乃名番れ目錄也古板
本等皆得字脱漏今校正増入せ
しむるものなり

享保十九年正月

大枝流芳記

志野宗温六十一種名香記考正

紅麈

麈字本去改麈

迦加

麈板に二字也香名大字に書て麈板の字例と今其板とて改細字とす一圍城の字は所なくこも十種の中圍城が一種迦加と云はるるは今改と

麈板斑

麈字本去改麈

老梅の下迦加の細江と脱と今本去補へ八年垣丹霞の下也是は同一蘭子のこち字旧板よりと削

終上馬乃一様香板と脱と今補へ

五十種

板の字終より

六十種

一の字香板と脱と又板香の字は

十二種

本去十三種より

有書奥中省也此や字巴字

あり此本改省巴の宗温の子や

右六十一種名香記香板誤字異

同どうあるあるをを以もつてて美い年ねんにに以もつてて考かんををととてて復ふにに化かししてて心こころにに正ただすす

大校流芳校正

香道秘傳校正上巻終

